

特別展「生誕150年記念 筏井竹の門展」出品目録

〔会期: 令和3年(2021)7月31日(土)～10月31日(日)〕

近代高岡文芸の盟主で俳人・俳画家の筏井竹の門(1871～1925)は、郷土の俳壇の発展に貢献し、また俳画や短歌にも優れた近代高岡を代表する文人です。

竹の門は現金沢市の旧加賀藩士・向田家に生まれ、本名は虎次郎、号は竹の門のほか北雪・此君・四石・松杉窟など多くあります。明治25年(1892)高岡に転居後、正岡子規の高弟の一人・河東碧梧桐に師事し、日本派俳句会「越友会」の指導や俳誌『葦附』の刊行、新聞俳句欄の選者を務めるなど、郷土の俳壇の発展に大きく貢献しました。また大正期以降は、富田溪仙・小川芋銭・小川千甕らと親しく往来して俳画にも打ち込み、多数の淡彩墨画も残しています。そのいずれもが朴訥とした味わいをもち、人物・草花への慈愛に満ちています。

本展では当館が収集してきた竹の門の俳句や俳画などの資料を中心に展示し、生誕150年を迎える竹の門の世界を紹介します。

本展開催にあたり、格別のご協力を賜りました、江沼半夏氏・室崎是氏・中田洋子氏・室崎建太郎氏ほか貴重な資料をご寄贈くださいました関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	内容	所蔵 (寄贈者)
1	写真パネル「筏井竹の門肖像」	明治42年 (1909)	1	—	筏井竹の門(1871～1925)は、明治後期～大正期の高岡を中心とした越中俳壇の発展に尽力した(日本派「越友会」創立同人、同派で活躍、新聞俳壇選者、『葦附』創刊、浪化忌)。河東碧梧桐(1873～1937)の新傾向俳句や六朝風の書に共鳴し多くの俳句を作った。大正期には富田溪仙(1879～1936)の影響を受け、俳画家としても多くの作品(伝8千～12千点)を残した。大正中期中以降は歌人としても活躍し、歌集5冊が出版された。竹の門の逝去後は、俳誌『懸葵』(竹の門追悼号)に、高岡のみならず全国の著名俳人・画家が多く寄稿するなど、多くの文化人らと生涯にわたり交流をもち、多くの後身を育てた。享年53	原本・個人
2	新聞「日本」(複写)	明治30年 (1897)12月6日付	1	—	左下に越友会(同年7月25日創立)の会報(筆頭は竹の門2句)が掲載されている。山口花笠編『守水老遺稿』(大正3年初版)より。新聞「日本」は明治22年(1889)2月11日陸羯南が発刊。文芸欄は社員の正岡子規が選者で門弟の河東碧梧桐、高浜虚子らが投句した。また短歌、俳句等の革新的な評論・随筆を連載し、短歌のアララギ系や俳句の日本(ホトトギス)派が隆盛となる基礎を作った	当館
3	俳句雑誌『ほとゝぎす』(複写)	明治31～41年 (1898～1908)	9	—	『ほとゝぎす』に掲載された竹の門(北雪)の投稿俳句等の抜粋。明治32年1月号では正岡子規に「越の竹の門、花笠等亦進歩の著しき者なり」と名を上げて評価されている。竹の門にしては珍しい紀行文「雪の雨ばらし」(同40年3月)もある。また毎号越友会等の高岡にあった多くの俳句会の活動報告がある。『ほとゝぎす』は明治30年創刊(同34年10月に『ホトゝギス』に改題)。子規、高浜虚子、河東碧梧桐、内藤鳴雪らが選者。夏目漱石が小説『吾輩は猫である』、『坊っちゃん』を発表したことで知られる	当館

4	俳句選集『春夏秋冬』（全4冊）	明治34～同36年(1901～03)	4	【4冊同寸】 15.3×10.9	明治30年(1897)以降の正岡子規率いる日本派の代表的句集。春の部の選者は子規。それ以降は子規の弟子・河東碧梧桐と高浜虚子。春の部には、子規や夏目漱石、碧梧桐らと並び、竹の門の句が計14句掲載されている（夏の部には10句、秋の部には6句、冬の部には5句掲載）	当館
5	俳誌『ホト、ギス』（第9巻第1号）	明治38年(1905)10月10日	1	22.4×15.4	発行・ほとゝぎす発行所。「募集俳句」欄で竹の門の句が2句入選、地方俳句会報欄「有磯吟社」に竹の門の句が1句掲載	当館
6	俳句選集『続春夏秋冬』（全4冊）	明治39～40年(1906～07)	4	【4冊同寸】 15.2×11.0	河東碧梧桐選。発行・俳書堂杵山書店。竹の門の句が計12句掲載	当館
7	俳誌『新選一萬句』	明治41年(1908)第3版	1	12.5×18.5 ×厚3.0	今井柏浦編。発行・博文館。竹の門の句が35句掲載	当館
8	俳誌『懸葵』（第4巻第12号）	明治41年(1908)2月15日	1	22.1×15.3	中川重麗編。発行・懸葵発行所。竹の門の句が1句入選、有磯吟社に1句掲載	当館
9	新聞「高岡新報」（複写）	明治43～大正13年(1910～24)	9	—	竹の門は明治42年頃より高岡新報の俳壇選者を務め、越友会員をはじめとした多くの俳人を育成した。そして、死の床に伏す大正14年(1925)3月19日、弟子の木津蛭雪にその任を譲っている（同29日没）。竹の門は本紙で16年間選者を務め、地方俳壇のリーダーとなった。「高岡新報」（夕刊）は明治22年(1889)、高岡米商会所の業界紙として創刊された「高岡商況」を前身とする（同25年に改題）。昭和6年(1931)「高岡新聞」と改題。同15年、1県1紙の4紙統合により「北日本新聞」となる	協力・高岡市立中央図書館
10	写真パネル「河東碧梧桐肖像」	明治42年(1909)	1	—	河東碧梧桐(1873～1937)は、愛媛県松山市出身の俳人。本名秉五郎。初め女月、のちに梧桐・青桐などと号した。松山中学時代より、正岡子規に俳句を学ぶ。日本新聞社に入社し、友人の高浜虚子とともに子規門下の双璧となった。明治30年6月北陸に来遊し、能登七尾から伏木に入り、現高岡市和田の西光寺住職・寺野守水老宅に滞在し、俳談・句作に没頭したことが縁で、同年7月、守水老のほか竹の門、花笠らが集まり日本派俳句会「越友会」が結成され、富山近代俳句が創始された。子規没後は「新傾向俳句」を提唱し、竹の門をはじめ県内の俳人らに大きな影響を与えた。しかし、大正14年竹の門の死去で県内の新傾向運動は後退、碧梧桐はやがて「自由律俳句」を主張し、俳壇は新興期を迎えた。主な句集に『新傾向句集』『八年間』などがある	原本・個人
11	写真「竹の門邸・松杉窟での河東碧梧桐」	明治42年(1909)	1	27.0×41.5		原本・個人
12	河東碧梧桐筆 俳句短冊《雛の尾の》	明治～昭和期	1	36.2×6.0	正岡子規の高弟で、俳人の河東碧梧桐が書いた俳句短冊。「雛の尾のしだれの舄も紅葉／かな 碧」。碧梧桐は、古代中国（漢～六朝時代）の書に影響を受け、竹の門もまたそれに影響を受けた	当館
13	写真「高岡市和田・西光寺」		1	35.6×47.5	浄土真宗本願寺派。寺号は十禅山西光寺。日本近代俳句会「越友会」発足の地で、当時の住職は寺野甘涯(俳号・守水老。1836～1907)	当館

14	写真パネル「寺野守水老肖像」	明治後期	1	—	寺野守水老(1836～1907)は俳人。婦負郡城生村(現富山市八尾町)出身。現高岡市和田・西光寺の養子となり寺野姓を継ぐ。俳譜を半雪居野鶴に学び、号は甘涯、煙霞亭などと号し宗匠株となる。明治30年(1897)、高岡に来遊した河東碧梧桐に接してのち、正岡子規の「日本派」の俳人に転じる。同年7月、寺嗣の寺野竹端・山口花笠・竹の門らと日本派俳句会「越友会」を結成した。本県俳壇の変革に大きな役割を果たす。和田の西光寺境内に入ると向かって右側に守水老・竹湊の句碑が並んでいる	原本・西光寺
15	写真「越友会百回記念俳句会(高岡梅松園にて)」(複写)	明治38年(1905)10月22日	1	—	高岡駅前(末広町)通りにあった料理旅館・梅松園で行われた、越友会百回記念俳句会の撮影写真。前列左から渡邊天雞、巴陵句鬼、寺野守水老、林南園、辻幽香、大橋進。中列左から山口花笠、平野立涯、竹の門、石川茂生、(子ども)、藤森百種、舟木香洲、五艘霞翠。後列左から六書堂、高田東洋、平下五堂、寺野竹湊。当時を代表する越友会員の顔ぶれがわかる貴重な写真	当館〔山口花笠編・越友会発行『守水老遺稿』(1941年)より〕
16	写真パネル「河東碧梧桐氏歓迎 中越俳句大会 於 木津楼」	明治42年(1909)7月25日	1	—	高岡市定塚町の料理旅館・木津楼で開かれた中越俳句大会の写真。2列目左より2人目が竹の門、5人目が碧梧桐、右より3人目が花笠。金沢から旧制第四高等学校教授の大谷繞石、松下紫人、金沢北声会の桂井未翁総勢34名参加の大俳句会だったという	原本・個人
17	写真「筏井竹の門画 西光寺内『煙霞亭』句会の図」	大正初期頃	1	30.8×45.1	高岡市和田・西光寺にある煙霞亭で行われた句会の様子を描いたもの	当館〔山口花笠編・越友会発行『守水老遺稿』(1941年)より〕
18	写真「守水老句碑」	昭和5年(1930)建立	1	48.1×32.1	高岡市西光寺住職・寺野守水老(1836～1907)の没後23回忌に、同寺の前庭に建立された陶製の句碑「秋風や 海へなだるる 山の雲」。守水老は、東京の俳人・内藤鳴雪や鎌倉の俳人・松本翠涛とともに「日本派の三老」とよばれた	当館
19	山口林造(花笠)編『守水老遺稿』	昭和16年(1941)増補再版	1	18.7×13.3×厚1.4	寺野守水老(1836～1907)が生前遺した俳句などを集めて掲載した冊子。初版は大正3年(1914)12月。山口花笠編、越友会発行。本書では、碧梧桐が序文を書き、俳人の高浜虚子や内藤鳴雪らの追悼句(写真版)なども紹介されている	当館
20	吉野臥城監修『明治百人十句』	明治43年(1910)	1	15.3×10.9×厚1.5	明治俳壇の代表的俳人や地方で活躍した俳人100人を選び、それぞれの人物の10句を掲載。監修者の吉野臥城(1876～1926)は、宮城県出身の詩人、歌人、俳人、評論家、作家。富山県からは竹の門のほか、寺野竹湊、山口花笠ら3名の越友会員が選ばれている	当館

21	山口花笠略歴（複写）	明治43年（1910）	1	—	山口花笠（1878～1944）は現高岡市和田出身の俳人。本名は林造、別号は吟風洞。高岡育英小学校卒。16才頃から句作を始め、明治28年（1895）頃から同郷の句友・寺野竹湊らと語らい、雑貨商の傍ら、新聞「日本」の俳句欄に投稿、正岡子規の選を受ける。明治30年7月発足の日本派俳句会「越友会」の世話役を務めた。子規没後は河東碧梧桐につき句作、その後大谷句仏（東本願寺23世）の『懸葵』に加わり活躍し、本県俳壇にその名を高めた。大正14年の竹の門死去にともない「越友会」代表を継いだ。その後、『辛夷』に所属。昭和3年に『守水老遺稿』を著す。生前句集は出さず死後、高岡文化連盟により高岡古城公園卯辰山に句碑「雪解の北に流るる大河かな」が建てられ、同19年には句集『花笠句抄』が出版された。享年65	当館〔吉野臥城監修『明治百人十句』（1910年）より〕
22	山口花笠筆 俳句短冊《落栗や》	明治中期～昭和前期	1	36.2×6.0	「芒穂のみに／日の白し山蔭にして／竹の門」	室崎是氏
23	寺野竹湊略歴（複写）	明治43年（1910）	1	—	寺野竹湊（1869～1942）は、守水老の跡を継いだ現高岡市和田の西光寺住職。本名宗欣。また東南と号する歌人でもあった。明治28年（1895）頃から新聞「日本」の俳句欄に投句をはじめた。日本派俳句会「越友会」の設立に守水老・竹の門・花笠らとともに参画した	当館〔吉野臥城監修『明治百人十句』（1910年）より〕
24	筏井竹の門略歴（複写）	明治43年（1910）	1	—	竹の門作の俳句10句のほか、略歴（顔写真、出身地、職業、俳句の所属団体等）が掲載	当館〔吉野臥城監修『明治百人十句』（1910年）より〕
25	俳誌『新俳句』	大正元年（1912）第7版	1	18.7×12.9	正岡子規関。発行・民友社。竹の門の句が2句掲載	当館
26	『ホトトギス 雑詠集』	大正4年（1915）	1	18.7×12.7×厚1.8	高浜虚子選。発行・四方堂。竹の門の句が1句掲載	当館
27	俳誌『オクヤマ』（第6巻第7号・第7巻第1号、9号）	【第6巻第7号】大正4年（1915） 【第7巻第1号】大正5年（1916） 【第7巻第9号】大正6年（1917）	3	【第6巻第7号】23.7×16.2 【第7巻第1号】24.0×16.3 【9号】23.6×16.1	発行・奥山会。各号に竹の門の句が5句ずつ掲載	当館
28	俳句選集『新春夏秋冬』	大正5年（1916）再版	1	15.3×11.3×厚3.0	松根東洋城選。発行・俳書堂。竹の門の句が16句掲載	当館
29	俳誌『熱』	大正8年（1919）4月15日	1	22.0×15.2	発行・熱吟社。竹の門の句が2句掲載	当館
30	木津蛭雪編『竹の門句集』	大正10年（1921）	1	15.1×10.4×厚0.7	弟子の木津蛭雪・篠島眠石・北本有田楼が散逸しつつある師の句約3千句のうち、千余句を選んで自主的に編集した句集。竹の門と親交のある大谷句仏や碧梧桐、溪仙、小川芋銭、塩谷鶴平、花笠らの題句や序文、画が添えられている	当館

31	俳誌『燃生』	大正10年 (1921)	7	①【第5号】 24.5×16.1 ②【第6号】 22.2×15.4 ③【第7号】 22.3×15.6 ④【第1巻第 8号・4月 号】22.2× 15.2 ⑤【第1巻第 9号・5月 号】22.2× 15.1 ⑥【第1巻第 10号・6月 号】22.0× 15.0 ⑦【第1巻第 11号・7月 号】22.1× 15.0	発行・十日会、燃生詩社。各号に竹の門の句（①は4句、②は10句と燃生を祝す1句、③は8句、④は6句、⑤は5句と木津観桃句会での1句、⑥は7句、⑦は5句）のほか、⑦には木津蛭雪の句に対する句評文が掲載	当館
32	俳誌『林檎』（第1集・第2集）	大正14年 (1925)4月	2	【第1集】 27.6×20.0 【第2集】 27.1×19.6	発行・林檎社。第1集には竹の門の句が5句掲載	当館
33	筏井竹の門書簡（室崎間佐七宛）	明治44年 (1911)10月4日	1	9.2×14.2	初公開資料。高岡小馬出町の勤め先「北一」経営者一族・室崎間佐七(1865?～1934)に宛てた葉書。飛騨高山に滞在中の間佐七宛に、竹の門が高岡の芝居小屋・巴座で、大阪の浄瑠璃名人・3代竹本大隅太夫の「壺坂霊験記」を聴いたとある。同社創立の室崎本家の6代間平(1850～1924)・間佐七らは生涯竹の門を支援した	室崎是氏
34	筏井竹の門書簡（室崎佐太郎宛）	年未詳（大正末期頃）6月3日	1	14.2×9.1	初公開資料。高岡木舟町の室崎分家・佐太郎(1878～1959)宛（宛先は「高田市上職人（現新潟県上越市大町三丁目）／北一支店」）。高岡の大ツツジを見る2人の後姿が描かれ、大正13年(1924)末より病床に伏す竹の門が病氣見舞いを謝している。佐太郎の弟は童謡「夕日」の作曲家・室崎琴月（清太郎／1891～1977）	当館
35	筏井竹の門書簡（室崎佐太郎宛）	大正7年 (1918)11月3日	1	14.2×8.9	初公開資料。仕事で大阪にいる室崎佐太郎に、大牧温泉（現富山県南砺市利賀村）より、養老昆布（昆布巻等に使われる贈答用昆布）と昆布茶を本日受け取ったので、その礼を伝える。竹の門は、大正3年頃より毎年秋に支援者の室崎間佐七らと半月ほど大牧温泉に滞在して、創作や山遊びなどを行っている。この絵は何かを書いている間佐七を描いている	当館
36	室崎間佐七・筏井竹の門書簡（室崎三郎宛）	大正8年 (1919)10月5日	1	14.2×9.1	初公開資料。大牧温泉滞在中の室崎間佐七より、息子・三郎宛（高岡市源平町）。現砺波市庄川町金屋の金屋館にて鮎を焼いてもらう様子を竹の門が描き、余白に間佐七がそれは美味であったと伝えている	室崎是氏

37	筏井竹の門ほか2名 書簡（室崎清七宛）	大正8年 (1919)10月7日	1	9.1×14.1	初公開資料。大牧温泉滞在中の竹の門と「牧の」、「室崎」（間佐七か）が室崎分家（6代間平の弟）清七(1851～1931)に宛てた葉書。竹の門が描いた大きな鮎の絵の余白に、おそらく室崎間佐七が当地の今年の鮎は大きく美味しかったことなどを伝えている	当館
38	筏井竹の門書簡（安嶋太次郎宛）	大正8年 (1919)10月6日	1	14.0×9.1	竹の門が大牧温泉滞在中に、同じ勤め先の「北一」東京出張所社員・安嶋太次郎に宛てた葉書。草の茂みで木こりが斧を振りかざす瞬間を描く	当館
39	北一(株)「黒貝2号揮 発油 回数注油券」	昭和中～後期	3	(各) 13.7 ×7.7	北一(株)石油部が発行する、黒貝2号揮発油の回数注油券。同社は現在も石油やガソリンなどを販売を行う会社である	当館
40	写真「北一(株) ガソ リンスタンド」（複 写）	昭和6年(1931)	2	—	昭和6年(1931)高岡市小馬出町で営業していた頃の北一(株)のガソリンスタンド前の写真	原本・個人
41	写真「高岡市土蔵造 りのまち資料館」 （複写）	令和3年(2021)	1	—	現在、北一(株)は高岡市土蔵造りのまち資料館となっている	当館
42	写真「北一(株) 各勘 定内訳書、給与辞 令」（複写）	明治中期～大 正年間	1	—	北一で竹の門が、庶務兼計算係として勤務していた頃に作成された、使用人履歴書や給与支払い帳簿、給与辞令など。竹の門が書く、碧梧桐に影響を受けた文字が見られる	個人
43	広告「北一株式会 社」（複写）	昭和5年(1930)	1	—	竹の門の勤務先・北一株式会社の宣伝広告。同社は、綿糸綿布、石油・重油販売など幅広く商売していた	当館〔『商工案内』（高岡商工会議所、1930年）より〕
44	写真「富田溪仙肖 像」	明治～大正期	1	27.5×19.0	富田溪仙(1879～1936)は、福岡県博多出身の日本画家。本名は鎮五郎、字は隆鎮、別号に雪仙、溪山人など。はじめ狩野派を学び、京都に出て四条派の都路華香の門に入る。のち仙厓義梵、富岡鉄斎に傾倒し、また奈良・平安朝の仏画も研究した。富山・石川・岐阜（飛騨）各県を回り多くの作品を描き、多くの俳人らに大きな影響を与えた。大正4年からは日本美術院同人、昭和10年には帝国美術院会員となり、反骨の画家・自由な画家として個性ある画風を展開した。享年58	原本・個人
45	写真「筏井竹の門と 長男・嘉一、富田溪 仙」	明治44年 (1911)9月14日	1	42.7×30.3	竹の門が溪仙と初めて出会ったころの写真。左は竹の門、中央は溪仙、右は竹の門の長男で歌人の嘉一(1899～1971)。溪仙は高岡古城公園などで散歩する際には、嘉一と一緒にいったという	個人
46	室崎間佐七筆『雑記 帳』第七号	大正3年 (1914)6月13日 ～9月6日	1	20.7×14.6	初公開資料。竹の門を支援した、高岡小馬出町の「北一」経営者一族・室崎間佐七(1865?～1934)が、竹の門や溪仙たちと温泉地などへ出かけた際に書き留めた旅の記録。竹の門や溪仙の「扇面合作」（大正3年）が描かれた際の旅行記の詳細の他、北一(株)などの仕事の情報が詳細に記録されている大変貴重な資料である	室崎是氏

47	筏井竹の門賛・富田 溪仙画《扇面合作》 (二見温泉にて)	大正3年(1914)	1	16.8×52.2	竹の門と福岡県博多出身の日本画家・富田溪仙(1879～1936)との合作扇面。本資料は大正3年7月15日から21日まで溪仙ら7名と黒部峡谷から信州へ旅行し、その間の16日夜に二見温泉(黒部峡谷内の小温泉の一つ)に泊まった折に描かれたものと考えられる。竹の門の俳面熱は、明治44年に溪仙が竹の門のもとを訪れたのを機に始まり、その作品数は8千点とも、1万2千点ともいわれる	当館 (株織田幸銅器)
48	筏井竹の門画《俳画 屏風》	大正初期	1	【本紙】各 扇102.0× 42.5	6点の俳画を屏風仕立てにしたもの。6扇全てに同じ落款「竹の門生」と印章の白文方印「四石」がみられる。一番右の第1扇には梅図、第2扇には松図、第3扇には観音図と俳句「今の世の人間小さしねはん像」、第4扇には白梅図に俳句「袷着て皆弓槍に遊びけり」、第5扇には人參・葱・林檎図に俳句「富を積めば時口あり落葉風すさふ」、第6扇(一番左)にはナナカマドの木が描かれる	当館 (古谷昭史氏)
49	筏井竹の門画《貼り 交ぜ屏風》	大正初期	1	【本紙】各 扇115.0× 43.2	19点の俳画を屏風仕立てにしたもの。それぞれに印章の朱文円印(描印「○にス」・「○に杉」など)がみられる。人物や動物、植物などの画が描かれる。一番左(第6扇)の下の絵に「大正四年」(1915)とある。全体的に画が固く、こなれていないので、明治44年(1911)8月に富田溪仙の影響により俳画を始めて間もない時期の作品とみられる	当館
50	筏井竹の門画賛 短冊 《秋桜図》	大正2～5年 (1913～16)頃	1	36.0×6.0	桃色のコスモスが1輪描かれる。「庵杉の空澄めり／鴟の高鳴に／竹の門(描印「㊦」)」	当館
51	筏井竹の門画《霞ヶ 瀧図》	大正7年 (1918)11月	1	142.5×33.2	紅葉で赤く色づいた木々の間を滝が流れ落ちる様子を描く。霞ヶ瀧は、現南砺市上梨(世界遺産・相倉集落付近)にあり、「遠洞峡谷」(南砺市指定名勝天然記念物)に含まれる紅葉の名所である。「五ヶ山中／霞ヶ瀧／戊午秋十一月／四石山人(描印「㊦」)」	当館
52	筏井竹の門画《桜 図》	大正8年(1919)	1	136.8×33.1	初公開資料。桜並木が連なり、傍には雪洞が描かれる様子を描く。「己未春 四石山人(白文方印「四石」)」	当館
53	筏井竹の門画《画帖 『瞰流帖』	大正8年 (1919)10月	1	10.3×7.2× 厚2.0	竹の門が、大正8年に大牧温泉を訪れた際に描いた画帖(表・裏に計12点の画)。東砺波郡の東山見村金屋(現砺波市庄川町金屋)、平村祖山(現南砺市平村)、利賀村新山(現南砺市利賀村新山)などの地名がみられる	当館 (寺田白樺洞)
54	筏井竹の門画 短冊 《大牧の子図》	大正8年(1919)	1	36.1×6.1	初公開資料。「大牧の子 己未秋(朱文方印「虎」)」	室崎是氏
55	筏井竹の門画《向日 葵図》	大正8年(1919) 以降	1	136.8×33.2	画面に大きく向日葵が描かれる。「四石山人(朱文方印「虎」)」	当館

56	筏井竹の門画賛《白菜図》	大正9年 (1920)12月	1	136.3×22.2	竹の門の描いた白菜と、自らの賛（画に添える詩文、俳句等）が書かれる。「限りなき時の中より年々の／年の終りの惜しくもあるかな／大正九年師走 竹の門生（朱文方印「虎」）」	当館 (永森規一氏)
57	筏井竹の門画《竹梅図》	大正10年 (1921)4月	1	136.2×32.4	前景に笹の葉が、背景に梅が描かれる。「辛酉四月／竹の門生（朱文円印「四石」）」。号の「四石」は、竹の門邸「松杉窟」（高岡市桐木町）の庭の四隅に石があったことによる別号という（『筏井竹の門覚書』）	当館 (北正作氏)
58	筏井竹の門画 短冊《ゲンノショウコ図》	大正10年 (1921)	1	36.1×6.0	初公開資料。「ゲンノセウコ／竹の門（朱文方印「虎」）」	室崎是氏
59	筏井竹の門画《太古石竹図》	大正11年 (1922)7月	1	136.7×33.3	画面中央には存在感のある大きな石が、背景には笹の葉が描かれる。「壬戌七月 竹の門生（朱文円印「四石」）」	当館
60	筏井竹の門画《珊瑚樹図》	大正11年 (1922)8月	1	135.8×32.6	画面いっぱいには珊瑚樹（スイカズラ科の常緑小高木）が力強く描かれる。本資料は、寄贈者の夫の長兄の誕生と、母の産後の体調回復の願いを込め、竹の門に直接頼んで描いてもらったものだという。「壬戌八月 竹の門生（白文方印「四石」）」。珊瑚樹には健康祈願や火災除けの願いが込められているといわれる	当館 (松澤君代氏)
61	筏井竹の門画賛《金柑図》	大正11年 (1922)12月	1	136.8×32.8	竹の門による鉢植えの金柑と、自らの句賛が書かれる。「水飯や／萩はほつゝ／花になり／竹の門并題（白文方印「四石」）」。共箱蓋裏に「壬戌師走竹の門題（朱文方印「虎」）」とあることから年代がわかる	当館
62	筏井竹の門画《薊図》	大正12年 (1923)3月	1	142.6×34.2	絹本に薊（菊科の多年草）が描かれる。「癸亥三月 竹の門生（白文方印「四石」）」。箱書きは、現南砺市井波出身で大正期に活躍した俳人・竹村蘭母子。竹の門は、同年9月20日、21日に南砺市利賀村の大牧温泉で蘭母子と会った。関東大震災の話や、浪化（1672～1703。井波瑞泉寺住職・俳人）や浪化の子・桃花、俳人・三浦樗良（1729～80）の俳画のことを聞いたり、句作をした	当館
63	筏井竹の門画 短冊《髪洗い図》	大正13年 (1924)	1	36.1×6.1	初公開資料。「髪洗ひ／竹の門生（白文方印「独苦／寒」）」	室崎是氏
64	筏井竹の門画《画帖『霊泉帖』》	大正13年 (1924)	1	24.0×18.0 ×厚2.1	表・裏それぞれの見開き頁に、計14点（画・8点、句6点）を描く。表面は、大牧温泉行き（大正13年8～9月）の様子を描いており、これが竹の門の最後の旅行となった。裏面は黒部行き（大正13年7月）。温泉地での旅の様子がうかがえる貴重な資料である	当館
65	筏井竹の門筆《百合図》	大正期	1	127.2×17.2	花瓶に生けられた百合が描かれる。「竹の門生（白文方印「竹廼／門」）」	当館

66	筏井竹の門画《松図》	大正期	1	139.1×34.2	何本もの松の樹の枝がうねるように伸びる様子が画面いっぱいに描かれ、松の木肌や枝の節々が、墨の濃淡でうまく表現されている。「竹の門生（朱文方印「虎」）」	当館
67	筏井竹の門画《国分寺附近》	大正期	1	46.0×47.6	初公開資料。高岡・伏木一の宮にある国分寺周辺の風景を描いたもの。越中国分寺跡は、昭和40年10月1日に富山県指定史跡に指定された	当館
68	筏井竹の門画賛《紫蘭図》	大正期	1	135.0×33.5	画面中央から下部にかけて紫蘭（ラン科の多年草）と、自らの句賛が書かれる。「庭木の西空明るく新聞を／見れば蚊の来る／竹の門生（白文方印「独苦／寒」）」	当館
69	筏井竹の門画賛《ボプラ図》	大正期	1	136.5×22.2	枯れたボプラの枝葉と、自らの句賛（さん）が書かれる。「工場閉鎖して枯るゝ蓮田の／山近し／竹の門并題（朱文方印「虎」）」	当館 （永森規一氏）
70	筏井竹の門画賛《南天図》	大正期	1	136.9×22.2	画面には南天が描かれ、上部には自らの句賛が書かれる。「鉢の河鹿鳴かんとしてハ／鳴かず午后の日ざし／竹の門并題（描印「  」）」。「河鹿」はカジカガエルのことで、夏の季語に使われる	当館 （永森規一氏）
71	筏井竹の門画賛《杜若図》	大正期	1	135.8×32.3	苗が植えられた水田の脇に杜若が描かれ、上部には自らの句賛が書かれる。「竹の門并題（朱文方印「虎」）」／水張りし田の／さゞ波や／初夏の雲。箱書きは、京都出身の画家・小川千甕(1882～1971)。千甕もしばしば高岡に来て竹の門に影響を与えた	当館
72	筏井竹の門画賛《長春図》	大正期	1	145.2×23.0	鉢植えの長春花（バラ科の常緑低木）を描き、自らの句賛が書かれる。「言葉慎むべし／子のあればほたる／竹の門并題（朱文方印「虎」）」	当館 （寺田白樺洞）
73	筏井竹の門画 短冊《水仙図》	大正期	1	36.1×6.0	初公開資料。「竹の門生（朱文方印「虎」）」	当館
74	筏井竹の門画 短冊《高士観瀑図》	大正期	1	36.1×6.0	初公開資料。中国の文人である高士（志が高く、人格の高潔な人）が、流れ落ちる滝を見る様子を描く。「四石山人（朱文方印「虎」）」。観瀑図は漢画（中国絵画）の重要な画題とされ、「滝」は文人・高士の理想とされた存在だった	当館
75	筏井竹の門筆 俳句 短冊《芒穂のみに》	大正期	1	36.2×6.0	「芒穂のみに／日の白し山蔭にして／竹の門」	当館
76	筏井竹の門筆 俳句 短冊《雨後の月》	大正期	1	36.2×6.0	初公開資料。「雨後の月 竹千竿の／氷柱かな 竹の門」	当館

77	内島北朗肖像（複写）	昭和後期	1	—	内島北朗(1893～1978)は、高岡市川原町出身の俳人・陶芸家。本名喜太郎。明治40年(1907)に勤め先の「北一」で竹の門に出会い俳句を始める。俳句は河東碧梧桐・筏井竹の門に学び、高岡新報や碧梧桐の日本俳壇へも盛んに投句した。大正元年、金沢で北声会の松下紫人らと交流、その後は富山県立学校の大塚楽堂の自宅へ通って彫塑を学んだ。その後京都で陶芸修業後、大正5年頃自宅に築窯、「高岡焼」と称した。同14年には高岡で初めての個展を開いた。その間、竹の門の指導のもと荻原井泉水の『層雲』（明治44年創刊）に所属し句作、昭和29年には「層雲文化賞」を受け、同51年以降は『層雲』の会長を務めた。句集『光芒』、随筆集『壺中随筆』『陶工の楽書』ほか多数あり。享年84	原本・個人
78	筏井竹の門書簡（2枚組）（内島北朗宛）	大正12～13年 (1923～24)頃 6月20日	2	【右】23.3 ×49.8 【左】23.3 ×29.4	竹の門の弟子北朗宛。昨夜は久しぶりに竹の門宅で句会を開き、16名も参加した盛会であった。最近では若い人が多く覚えられない位である。最近、井波瑞泉寺住職で俳人の浪化とその子・桃化、及び三浦樗良等の研究が盛んだ。来る10月、井波にて私の百幅会を行い、彼らに関する展示もあることなどを伝えている	当館
79	筏井竹の門書簡（内島北朗宛）	年未詳5月2日	1	23.5×50.4	竹の門の弟子北朗宛。前日の曇天にもかかわらず、無事曳き回された高岡御車山のこと、竹の門自身の個展を開催したこと、北一の後輩・北朗に対し、同社の室崎間佐七が高岡打綿会社に異動したことなども伝えている	当館
80	筏井竹の門書簡（内島北朗宛）	年未詳（大正13年頃）8月12日	1	24.2×68.2	7月上旬頃に、風邪をひきながらも黒部へ旅行したこと、10年前に溪仙と信州越えの旅行に行ったことなどを伝える	当館
81	筏井竹の門書簡《俳画についての意見「烏賊図」》（内島北朗宛）	大正期	1	34.0×35.4	竹の門の俳句の弟子で陶芸家の内島北朗宛。世間の事は全て楽なことは無く、大きな事を思いつつ多くの人は何もできない。何でも一つしっかりしたものをつかんだら離さず、小さくてもよいのでよい質のものをつかめば充分だ。一度やりかけたら飽くまで頑強にやり通さねばならぬ。私は俳画だけでも中々重荷だが、これしかやれないから他事をやらないだけだ、などと助言している	当館
82	筏井竹の門筆《書簡「自画像」》（内島北朗宛）	大正12～13年 (1923～24)頃 8月27日付	1	36.0×33.8	竹の門が俳句の弟子で高岡川原町出身の陶芸家・内島北朗(1893～1978)に宛てた手紙。北朗夫人の快気のお祝いとともに自分の病状を伝える。病に苦しむ竹の門自身の苦悶の表情がよく描かれている	当館
83	筏井竹の門画 年賀状（沢田沢楼宛）	大正14年 (1925)元旦	1	77.5×21.0	竹の門が亡くなる年の正月に出した、高岡利屋町出身の家具職人であり俳人の沢田沢楼(1906～74)宛の年賀状。大きな牛に跨る人物が描かれる。大正13年12月頃から病気で寝ていることが多かった竹の門は、翌14年3月29日午後8時10分、萎縮腎により逝去した(享年53)。江沼半夏氏は「沢楼は自由律俳句を竹の門から継承し、これを散文律として展開した、竹の門の後継者と呼ばれるにふさわしい俳人」とする(『筏井竹の門覚書』)	当館 (澤田和夫氏)

84	俳誌『懸葵』 （「竹の門追悼 号」）第22巻第5号	大正15年 (1926)5月1日	1	22.4×15.3 ×厚0.6	明治37年(1904)に京都の俳人・中川四明 創刊。その後、大谷句仏が引き継いだ。 本号は、生前親交のあった人々が竹の門 を偲び、寄稿している。追悼句抄には句 仏、虚子、碧梧桐、溪仙ら69人の名がある	当館
85	竹の門の訃報記事 （複写）	大正14年 (1925)3月30日	1	—	竹の門逝去を伝える「高岡新報」の記事 （「筏井竹の門氏 昨夜遂に永眠」／ 「竹の門氏訃」）	当館〔『筏井竹 の門歌集』（筏 井とみ、昭和49 年）〕より
86	写真「和田煙霞亭に て」（複写）	明治36年 (1903)1月18日	1	【写真原 本】10.6× 15.1	現高岡市和田・西光寺内の「煙霞亭」で の撮影写真。旧派の俳諧宗匠で同寺住 職・寺野甘涯(1836～1907／号・守水老) は、正岡子規の高弟・河東碧梧桐(1873～ 1937)の俳論に影響を受けた。それを機に 明治30年7月25日、竹の門や寺野竹湍、山 口花笠など総勢9名で「越友会」が結成さ れた（富山県内初、全国で7番目）。前列 右より花笠、一人おいて守水老、林南 圃、藤森百種。守水老の後ろが碧梧桐、 右が竹の門、竹湍（子どもの後ろ）。竹 の門旧蔵写真17枚のうち	当館
87	写真「長崎にて」 （複写）	明治43年 (1910)3月	1	【写真原 本】13.7×9.7	初公開資料。河東碧梧桐より竹の門宛の 写真。左より碧梧桐、娘・みお（青木月 斗の実子で碧梧桐の養女）、碧梧桐妻・ 茂枝（月斗妹）、岐阜出身の俳人・塩谷 鶴平(1877～1940)、大阪出身の俳人・青 木月斗(1879～1949)。長崎市麹町 ひので 写真館撮影。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
88	写真「句仏上人を擁 して男山に詣つ記 念」（複写）	明治44年 (1911)2月22日	1	【写真原 本】9.7× 14.4	初公開資料。真宗大谷派の第23世法主 で、俳人・画家の大谷句仏(1875～1943／ 写真右隅)と、河東碧梧桐親子らの京都府 八幡市の石清水八幡宮（山頂に鎮座）男 山参詣記念写真。左より碧梧桐、同妻・ 茂枝、同養女・みお、右に立つ岩谷山梔 子(1883～1944)、その右は塩谷鶴平（共 に碧梧桐弟子）。竹の門旧蔵写真17枚の うち	当館
89	写真「城端水月吟社 大会記念」（複写）	明治44年 (1911)7月2日	1	【写真原 本】10.3×14.3	初公開資料。現南砺市城端で行われた俳 句大会記念写真。前列右より3人目が城端 出身の俳人・日本画家の野村満花城(1888 ～1968)。2列目右から2人目が溪仙、3人 目が竹の門。この年溪仙は、6月23日から 9月14日の新潟県に発つまで、主に竹の門 や満花城邸を拠点に、富山・石川・岐阜 （飛騨）各県を回り多くの作品を描い た。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
90	写真「梅松園偶会記 念」（複写）	明治44年 (1911)9月10日	1	【写真原 本】9.5× 13.6	初公開資料。高岡駅前（末広町）通りに あった料理旅館・梅松園での宴会写真。 左隅に竹の門、左から3人目が溪仙。右よ り3人目が金沢の新派俳句会「北声会」の 松下紫人(1881～1950。金沢第九師団勤 務・法学士)。ほか、本会には富山市の新 派俳句会「墨汁吟社」の高田稻光(1879 ～?)も出席したとある（『筏井竹の門覚 書』）。高岡市臼井写真館撮影。竹の門 旧蔵写真17枚のうち	当館
91	写真「城端満花庵に て碧師揮毫記念」 （複写）	明治45年 (1912)6月15日	1	【写真原 本】9.7× 14.3	初公開資料。現南砺市城端の野村満花城 邸で行われた碧梧桐の揮毫記念写真。満 花城は竹の門と同じく全国を席捲してい た碧梧桐の定型や季題にとらわれず生活 感情を自由に詠む「新傾向俳句」を、溪 仙に画を学んだ。竹の門旧蔵写真17枚の うち	当館

92	写真「高田稲光氏所蔵資料」（複写）	大正元年 (1912)8月14日	1	【写真原本】9.7×13.6	初公開資料。富山市の新派俳句会「墨汁吟社」の高田稲光(1879～?)が所蔵する資料を写した写真。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
93	写真「溪仙百幅会記念（集合写真）」（複写）	大正2年 (1913)10月12日	1	【写真原本】9.3×13.6	初公開資料。溪仙の百幅（展覧）会記念に撮影された写真。本会は、高岡市本町にあった料理旅館・高岡ホテル（明治38年創業）にて行われた。写真右は作品を揮毫する溪仙。竹の門自身も溪仙揮毫の敏速な様子に驚いたという。高岡・上野写真館撮影。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
94	写真「溪仙百幅会記念（溪仙揮毫写真）」（複写）	大正2年 (1913)10月12日	1	【写真原本】9.3×13.6	初公開資料。溪仙百幅会記念写真。会員200名余りが参加した。写真手前には作品揮毫中の溪仙、その右隣は竹の門か。左より3人目が篠島木風(1886～1918。高岡・長楽寺住職)か、6人目が関沢卯作、8人目が広島花溪楼(1877～1928)か（共に越友会員）。高岡・上野写真館撮影。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
95	写真「溪仙百幅会記念（会場写真）」（複写）	大正2年 (1913)10月12日	2	【写真原本】（各）9.3×13.6	初公開資料。溪仙百幅会場の設えなどを撮影した記念写真（2枚）。高岡・上野写真館撮影。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
96	写真「松杉窟記念」（複写）	大正2年 (1913)10月15日	1	【写真原本】9.6×13.6	初公開資料。明治33年(1900)の高岡大火後に建てられた竹の門邸「松杉窟」前での記念写真。前列左より2人目は室崎間佐七、後列左より2人目が竹の門、続いて木風、花笠、溪仙。高岡ホテルでの溪仙百幅会（同年同月12日）の3日後に溪仙は竹の門邸で揮毫し、夜は定塚町の料理旅館・木津楼で溪仙らの送別会を行った。高岡・上野写真館撮影。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
97	写真「千甕画伯作品展覧会記念 於 高岡商業会議所」（複写）	大正6年 (1917)6月10日	1	【写真原本】10.1×14.0	高岡利屋町の商業会議所で行われた京都出身の画家・小川千甕(1882～1971)の展覧会記念写真。前列左より花笠、千甕。2列目左より2人目は竹の門、3人目は巴陵句鬼(開正寺住職)、5人目は室崎間佐七。千甕もしばしば高岡に来て、竹の門らに影響を与えた。高岡・上野写真館撮影。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
98	写真「小川芋銭氏来岡 於 木津楼」（複写）	大正7年 (1918)9月20日	1	【写真原本】11.0×15.7	江戸出身の日本画家・小川芋銭(1868～1938)が高岡へ来た際、定塚町の料理旅館・木津楼での記念写真。前列左から3人目が室崎間佐七、4人目が芋銭、5人目が花笠。後列左より2人目が現射水市出身の洋画家・改井徳寛(1895～1951)、5人目が城端出身の俳人・日本画家の谷聴泉(1898～1939)、6人目が竹の門。竹の門は、芋銭を慕って自身の描いた画や句を贈ったという。高岡・上野写真館撮影。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
99	写真「本行寺北陸俳人大会にて（屋外写真）」（複写）	大正11年 (1922)7月16日	1	【写真原本】11.2×15.5	初公開資料。小矢部市の日蓮宗寺院・本行寺（1536年創建）で行われた北陸俳人大会で撮影された写真。右側の座っているグループ1列目左端が竹の門、4列目左から3人目が花笠。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館
100	写真「本行寺北陸俳人大会にて（屋内写真）」（複写）	大正11年 (1922)7月16日	1	【写真原本】11.1×15.7	初公開資料。同年11月に本行寺で行われた北陸俳人大会で撮影された写真。前列左より4人目が花笠、6人目が竹の門。竹の門旧蔵写真17枚のうち	当館

101	角陶風作 黒田焼 銘々皿（筏井竹の門 絵付）	明治中～大正 期	5	【向日葵】 径16.5×高 3.4 【芒】 径16.6×高 3.9 【紅梅】 径16.8×高 3.3 【浜茄子】 径16.8×高 3.1 【甘草】 径16.6×高 3.8	二塚村黒田（現・高岡市下黒田）で焼かれ た黒田焼の皿に、竹の門が絵付したも の。向日葵・芒・紅梅・浜茄子・甘草が 描かれる。黒田焼は角陶風（本名・太一。 1871～1926）が大正5年（1916）創始した。 「射水焼」ともいう。最盛期には大規模 に製陶していたが、長男・保の代で経営 困難となり、昭和3年（1928）廃窯した	当館
102	筏井竹の門画 絵付 中鉢	大正末期	5	（5点同型） 径17.9×高 6.0	竹の門が絵付けした中鉢。見込部分には 山・家・木などの風景のほか、菊、水仙 が描かれる。箱書きは、竹の門とも親交 が深かった現南砺市城端出身の俳人・俳 画家・篆刻家の谷聴泉（俳号・丹矢／1898 ～1939）。箱の蓋裏に「乙丑極月（陰暦12 月の異称）〔大正14年（1925）〕」とある ことから、箱書きは竹の門の死（同年3月 29日）後に書かれたものとわかる	当館
103	筏井竹の門画 黒田 焼 絵付茶鉢	大正5年（1916） 頃か	1	口径17.7× 高12.8, 高台 径6.7	竹の門が絵付した黒田焼の茶鉢。胴から 腰にかけて2匹の鹿と、見込に山と月が描 かれる。腰には竹の門の号「〇に杵」が 記されている	当館
104	角陶風作・筏井竹の 門画 黒田焼 徳利	大正期	4	（4点同型） 口径3.1×底 径4.3×高 12.5	現高岡市二塚出身の角陶風の製陶で、竹 の門が絵付した黒田焼の徳利。箱書きは 、竹の門とも親交が深かった現南砺市 城端出身の俳人・俳画家・篆刻家の谷聴 泉（俳号・丹矢／1898～1939）。箱の蓋裏 に「乙丑極月（陰暦12月の異称）〔大正 14年（1925）〕」とあることから、箱書 きは竹の門の死（同年3月29日）後に書 かれたものとわかる	当館 （寺田白樺洞）
105	『竹乃門遺墨集』	昭和2年（1927）	1	32.3×22.3 ×厚1.1	発行・竹の門句碑建設会。竹の門が描い た61作品が掲載。題箋・題句は河東碧梧 桐、題辞は富田溪仙両名による	当館
106	『竹の門遺墨集 続 集』	昭和11年 （1936）	1	32.1×22.4 ×厚1.2	発行・白鳳会。竹の門が描いた71作品が 掲載。題箋・題辞は富田溪仙による	当館
107	『竹の門遺墨集 第 三集』	昭和20年 （1945）	1	30.3×21.4 ×厚1.4	発行・白鳳会。竹の門が描いた87作品が 掲載	当館
108	筏井竹の門著、筏井 とみ編『筏井竹の門 歌集』	昭和49年 （1974）	1	19.4×13.5 ×厚2.0	発行・短歌新聞社。竹の門が大正7～10年 （1918～21）に作った歌のほか、略年譜、 訃報記事、生前交流のあった俳人・画家6 名の追悼文等が掲載	当館
109	『筏井竹の門遺墨百 選』	昭和49年 （1974）	1	36.7×26.3 ×厚2.2	発行・高岡市立美術館。同館で展示・公 開された竹の門作品100点が掲載（展覧会 期：同年10月24日～28日）	当館

110	「思い出の記」(複写)	昭和49年(1974)	4	—	『筏井竹の門遺墨百選』(高岡市立美術館、昭和49年)に寄せられた4人の追悼文。荻原井泉水(1884～1976)は東京出身の自由律俳句の俳人、俳論家。「層雲」を主宰、尾崎放哉や種田山頭火らを育てた。内島北朗(1893～1978)は高岡出身の俳人、陶芸家。碧梧桐、竹の門に学び、のち井泉水の「層雲」に参加自由律の俳人となる。小松砂丘(1896～1975)は現珠洲市出身の俳人・俳画家。臼田亜浪に俳句を、竹の門に俳画を学ぶ。石川県俳文学協会初代会長。村井盈人(1899～1976)は高岡出身の洋画家。中川一政に師事。日本水彩画展・二科展などに入選。のち郷土の画壇で活躍した	当館
111	写真「筏井家墓碑」	令和3年(2021)7月14日撮影	1	—	浄土真宗本願寺派の宮原山西土寺(射水市三ヶ本中町)。竹の門が入婿した高岡木舟町の洋反物店・筏井幸七郎家の墓碑(大正5年7月建立)。家紋は丸に片喰紋である。西土寺は文明2年(1470)の創始と伝え、寛文4年(1664)に現在地へ移転。加賀藩主が江戸で没すると、金沢に戻る途中に西土寺で遺体を一時安置した所縁から、5・7・8代藩主の位牌が残される。以前は位牌廟があり、その門の屋根(赤戸室石製)の一部が現存している	当館
112	写真「竹の門句碑・嘉一歌碑」	令和3年(2021)7月16日撮影	1	—	高岡古城公園小竹藪の西に親子の碑が並んで建つ。左の竹の門句碑「宴つづく思ひの朝寝さへづれり」(碧梧桐選)は没後2年の昭和2年(1927)5月27日、当初は岡古城公園三の丸に建立。同25年(1950)現在地に移設。嘉一の歌碑「ゆめさめてさめたるゆめは 恋はねども 春荒寥とわがいのちあり」は同40年(1965)9月、建立された。嘉一(1899～1971)は北原白秋の巡礼詩社に加わり、のち「蒼生」(現「創生」)を主宰。市井の人の生活に根ざした人間的で内省的な歌風をもつ。歌集は『荒栲』、『籬雨荘雑歌』	当館
113	写真「松杉窟跡地」	〔撮影〕令和3年7月17日	1	—	現高岡市桐木町にあった、竹の門住居「松杉窟跡地」の写真。明治33年(1900)の高岡大火により、片原町にあった住居(古杉窟)が類焼したため松杉窟に転居した。平成3年11月3日、「筏井竹の門／嘉一父子住居跡」碑が建てられた	当館

※本展は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館の影響により、10月31日(日)まで会期を延長して開催しました。

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。

※複写物の寸法は割愛しました。

計113件163点